

教育研究連携ユニット設置申請書

関連部局名	霊長類研究所、野生動物研究センター、東南アジア研究所、こころの未来研究センター、経済研究所、防災研究所、教育学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、地球環境学、工学研究科、理学研究科、農学研究科、医学研究科<調整中>
ユニット名	ヒマラヤ研究ユニット
代表者名 (氏名・所属・職)	湯本貴和 (ゆもと・たかかず) 霊長類研究所・教授
ユニットの概要等 (ユニット組織構想や設置期間内に達成しようとする目標も含む)	<p>京都大学は「探検大学」と呼ばれるほど、世界各地で初登頂や初調査をおこなってきた。とくにヒマラヤ地域での学術登山活動は他に類例がない。1955年の木原均・今西錦司らによるカラコルム踏査では、コムギの祖先種の発見があり、カラコルム4大氷河のトラパスという偉業を成し遂げた。翌1956年には京大士山岳会 AACK が計画し日本山岳会に委譲したマナスル登山隊が、マナスル(8156m)の初登頂に成功し、京大農学部卒業生である今西壽雄が栄えある初登頂者になった。本年2016年はマナスル登頂60周年であり、国民の祝日「山の日」の発足にあたる。続く1958年には、①今西錦司と伊谷純一郎のアフリカ初探検、②西堀栄三郎の南極初越冬、③桑原武夫のチョゴリザ初登頂という3つの大事業が成功した。その一方で、梅棹忠夫の文明の生態史観につながる東南アジア調査、川喜田二郎の西北ネパール、中尾佐助のブータンという若手研究者の個人調査が行われた。こうした一連の研究により、木原(遺伝学)、今西(霊長類学)、桑原(フランス文学)、梅棹(民族学)は、いずれも後年に文化勲章を受章している。こうした野外研究の「京都学派」と呼べる学問の系譜があって、理工医農だけでなく教育などの研究科での研究をはじめ、東南アジア研究所、霊長類研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科、野生動物研究センターといった他大学にはないユニークな教育研究組織が誕生している。さらに1985年のブータン・マサコン峰初登頂(堀了平医学部教授)、チベット・ナムナニ峰初登頂を経て、1989年に京都大学ヒマラヤ研究会ASHが組織された。1989-1990年には、ムズターグアタ峰とシシャパンマ峰(戸部隆吉医学部教授・病院長)に遠征隊を送って登頂に成功するとともに、低酸素環境下の医学研究を推進し、「ヒマラヤ学誌」を創設して四半世紀が経過した。その成果に対して秩父宮記念学術賞が授与された。ヒマラヤ学はさらに「フィールド医学」、「野生動物学」という、京都大学フィールド・サイエンスの新しい研究分野の創出につながっている。直近の活動としては、ヒマラヤの小国ブータンを対象に、京大ブータン友好プログラムを2010年10月から始めた。過去5年半、霊長類研究所が中心となって多数の部局の連携のもと、順調に成果を積み重ねてきた。派遣は15隊、のべ200余名の教職員学生がブータンに渡航した。また京大病院では総計78名の医師・看護師・職員をブータンに派遣している。「ブータンといえば京大、京大といえばブータン」という評価を確かなものとしている。</p> <p>そこでプログラムを継続発展させて京大のユニット組織とし、活動を恒常的に支援して、「ヒマラヤという第3の極地」を対象にしたユニークな教育研究施設の設置を目指したい。ブータンだけでなく、西はカラコルムから東は雲南まで、「グレートヒマラヤ」がその研究対象である。第3の極地を対象に、学術研究教育を展開する組織、「ヒマラヤ研究ユニット」(Unit for Himalayan Studies)である。ヒマラヤの研究は学際研究にほかならない。発足として約30名の京大教員を部局横断的に結集した。向こう10年間の計画で、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、京大とブータン王立大学の大学間交流協定(2013年締結)をもとに、京大ブータン友好プログラムを継続発展させて、ブータン一国まるごと全体を対象とした教育研究を実施する。 2、グレートヒマラヤの他の地域でも同様な研究教育を展開する：次の目標として、雲南、チベット、カシミール、カラコルム等がある。これらは東南アジア(研究)という地域ではくくれない、未知の未踏の領域だ。 3、「ヒマラヤ学誌」の継続発行をもとに京大の学術探検研究とフィールドワーク教育の求心力になる。これまでも氷河研究、フィールド医学などでパイオニアワークがあるが、新しい学問の創生をめざす。 4、京大の学術探検のデジタルアーカイブの作成に協力する：木原均・今西錦司の1955年のカラコルム以来60余年の伝統、京大士山岳会1931年の創立以来85年の伝統があり、貴重な資料が整理を待っている。

<p>ユニット構 成 員 (氏名・所 属・職)</p>	<p>湯本貴和、霊長類研究所、教授、ユニット代表者 幸島司郎、野生動物研究センター、教授、ユニット副代表者 松沢哲郎、霊長類研究所、教授 高井正成、霊長類研究所、教授 川本芳、霊長類研究所、准教授 早川卓史、霊長類研究所、特定助教 伊谷原一、野生動物研究センター、教授 平田聡、野生動物研究センター、教授 山本真也、野生動物研究センター、特任准教授 松林公蔵、東南アジア研究所、教授 清水展、東南アジア研究所、教授 安藤和雄、東南アジア研究所、准教授 藤澤道子、東南アジア研究所、連携准教授 奥宮清人、東南アジア研究所、連携准教授 坂本龍太、白眉プロジェクト、特定助教 吉川左紀子、こころの未来研究センター、教授 内田由紀子、こころの未来研究センター、特定准教授 熊谷誠慈、こころの未来研究センター、特定准教授 中嶋智之、経済研究所、教授 橋本学、防災研究所、教授 松岡雅雄、ウイルス研究所、教授 深町加津枝、地球環境学堂、准教授 竹田晋也、アジア・アフリカ地域研究研究科、教授 中務真人、理学研究科、教授 木村泰久、農学研究科、助教 吹田啓一郎、工学研究科、教授 西平直、教育学研究科、教授 明和政子、教育学研究科、教授 杉本均、教育学研究科、教授</p>
<p>設置期間</p>	<p>平成28年4月1日～平成37年3月31日</p>
<p>期待される 成果</p>	<p>「探検大学」とも呼ばれる京都大学のユニークな教育研究が発展する。総合大学の利点を生かして、生態系、防災、文化、教育、健康（GNH=国民総幸福）といった多様な課題について、文理の融合した学際的アプローチをする。SATREPS等の大型研究費の獲得ができる。日本学術会議の大型研究プロジェクトへの参画を、「ヒマラヤ第3の極地」としてめざす。海底探査のための研究機構、南極観測のための国立研究所があるのに、ヒマラヤについては「学問地図の空白部」になっている。そこに、すでにブータンを好例として、京都大学の総力を結集する下地が整った。「学際的かつ総合的なヒマラヤ学」が構築できて、京大が国際的な研究・教育・環境保全の中核になれる。</p>
<p>学際融合教育研究推進センター教育研究ユニットとしての活動予定</p>	<p>学際センターシンポジウムやユニット連絡会等、学際センター広報、行事、活動等への参加予定の有無： 有 市民公開講座「ヒマラヤ学」の開講、あるいは全学共通科目「ヒマラヤ学」の開設を求めていく。</p>
<p>設置期間終了後の構想</p>	<p>京都大学が中心となって、ヒマラヤを対象とした国立の研究機関の設置をめざす。</p>

必要経費とその財源	<p>【予算規模】(申請額) 平成 28 年度、2400 万円、次年度以降も同様</p> <p>【財源】 当面の間、主要な部局からの運営費等の持ち出しとする。なお過去の実績として全学経費と総長裁量経費等の支援があり、1200 万円/年。マッチングで同額を本部と各部局で負担する。なお、事務部局となる霊長類研究所は特別経費「人間の進化」等をこれにあてる。</p>
担当事務組織	<p>本ユニット内に「ヒマラヤ研究ユニット支援室」を設置して、専任の事務職員を配置して事務処理を行う。担当部局としては、霊長類研究所等事務部が全面的に支援する。</p>
その他留意事項	<p>京大ブータン友好プログラム http://www.kyoto-bhutan.org/ ならびに、同サイトでオンライン公開されている「ヒマラヤ学誌」 京大学士山岳会 http://www.aack.info/index-ja.html 上記を参照してください。</p>

- 1) 記述の量により適宜様式は変更して下さい。
- 2) 補足説明資料(概略図等)があれば添付して下さい。